いずみさの昔と今 第301回

「和泉木綿のはじまりと展開」

今号からは、1月23日㈯より開催される冬季企画展「タオル誕生―和泉木綿の紡いだ軌跡―」に関連して、泉佐野におけるタオル誕生の歴史についてお話ししたいと思います。第1回目は、泉佐野での木綿栽培のはじまりと展開についてです。

木綿が日本で最初に伝わったのは延暦18（799）年のことです。三河国（現在の愛知県）に漂着した船によって日本へ綿の種が伝えられましたが、木綿栽培は日本に定着せず、本格的に日本で木綿が栽培されるようになるのは戦国時代に入ってからのことでした。

泉州において木綿栽培が盛んになるのは戦国時代も終わる頃、慶長年間といわれています。小堀家の代官を務めた中庄の新川家に伝わる慶長6（1601）年の「中庄村年貢米中算用払状」に、御用として綿が納められた記録があることから、泉佐野においても戦国時代頃より木綿の栽培が始まっていたと推測されます。木綿は換金性が高いことから江戸時代を通して商品作物として栽培され、農家が現金収入を得るための主要な副業とされていました。とりわけ漁民の活躍が著しい泉佐野では、イワシを干して作る干鰯という肥料が手に入りやすいことから木綿栽培に適した土壌を整えやすく、生産量は増加の一途をたどりました。

さらに、木綿栽培が盛んになると同時に木綿の加工業や織物を取引する商業も起こりました。栽培された木綿は、実綿から種を取り除く綿繰という工程、繰綿を紡いで糸にする工程、紡いだ糸を織物にする工程などを経て反物となります。これらの工程は主に女性の副業として行われていましたが、元禄期（1688～1703年）以降専業化していき、繰綿屋や織屋などの専門業者が誕生しました。和泉地域で生産された木綿は、「白木綿」と呼ばれる薄地の木綿であるのが特徴で、厚地の河内木綿とは異なり、手拭いや着物の裏地に用いられました。和泉木綿の生産量は河内木綿をはるかに凌いでおり、天明7（1787）年における泉州地域の白木綿の生産量は50～60万反であったと推定されています。

このように木綿の生産や綿織物業が発展する一方、商品作物の生産が農業生産の妨げになっていると判断した岸和田藩は、宝永3（1706）年に綿織物業に対する規制をかけます。しかしあまり効果はなく、綿織物業は更に発展を遂げました。宝永6（1709）年、和歌山へ向かう道中の儒学者 伊藤東涯が「堺からここ（樫井）に至るまで、沿岸部は平らな田畑であり、皆目みな木綿である」と記しており、当時の泉佐野における木綿業の繁栄を物語っています。

▲糸紡ぎ機（当館蔵）

歴史館いずみさの 臨時休館のお知らせ

展示改修業務に伴い、臨時休館します。

休館日 1月13日㈬～22日㈮

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日 月曜日、祝日（祝日が月曜日の場合は月曜日と火曜日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料 無料

日本遺産・中世日根荘を巡る⑱

～旅引付編（2）「円満寺」～

JAPAN HERITAGE 日本遺産

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち ―中世日根荘の風景―」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先 文化財保護課

◀政基公旅引付

※旅引付の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用（原本は宮内庁書陵部所蔵）

前回紹介した「長福寺跡」を一望できる場所に現存する「円満寺（えんまんじ）」も、約500年前に九条政基が日根荘での生活を綴った日記「政基公旅引付」において記載されている文化財の一つです。

文亀3（1503）年に入山田村（現在の大木・土丸）の人々が円満寺で般若心経一万巻を講読して祈祷し、一万度参りをしたことが旅引付に記載されています。また、円満寺は九条政基によって番頭が窃盗犯を留置する場にもなっていたほか、守護方の日根野氏が日根野村の東方へ乱入してきた際には、早鐘を鳴らして住民を招集することもあったそうです。

円満寺は現在も下大木地区の集会所として利用され、「講」なども行われています。

▲円満寺（大木）